水と水草をめぐる思い出

橋 本 卓 三

私の住む広島県東南部では雨量が少なくて地形も山がちなため湖沼や大河川は見られず、雄大な陸水系と言ったものへの驚きを持った経験は私には無い。しかし、子供の頃をたどって見ると不思議と楽しい思い出のかなりな部分が水とつながっているのである。現在,私は廃水処理の仕事に携わっているが、その根底にはやはり子供の頃より慣れ親しんだ身近な水系とその変遷に対する記憶と言ったものが大きく潜在していると思っている。とりとめの無い話であるが、いくつか思い付くままに述べてみたい。

福山市から20kmほど入ったあたり、ちょうど芦田川が山間を貫流して急に平野に抜け出た場所に市街が拡がっている。 その南の丘陵に小さな溜池があって夏になると一面にヒシが浮び、たくさんのチョウトンボがひらひらと飛んでいた。 1960年頃の事である。岸から棒でかき分けると根の付いた水中茎が水底に向かって無数に垂れ下がり不気味な様でもある。 ひょろ長く徒長した見なれない水草が一本目に止まった。 深くて手がとどかない。帰って図鑑を見ると、どうもマツモと言うものらしい。しかし、確認はできないままにこの繊細な沈水植物に対する印象のみが子供心に定着してしまった。この年齢になってひょんな事から水草研究会に入ったのであるが、それまで永らく私はマツモなるものを実見する機会が無かった。近隣には分布せず、あの時のも見まちがいであろうと思い込んでいた。ところが、一昨年の夏に芦田川の河口湖を散歩中、汚れた水面に漂っているマツモを見る事ができた。又、秋には福山市駅家町の山沿いの古池で透んだ水中にフサジュンサイと共にたくさん生育しているのを確認した。どちらも節間の詰まった生育の良い個体であった。少ないながらもやはりマツモは存在したのである。

さて、ヒシであるが、葉柄のふくらみを指でつぶすとおもしろい様に泡が出る。昔はヒシ池も水が結構きれいであり、今の様に空カンやプラスチック等のゴミも無かった。水面に葉を放射状に展開したその姿も今では何の感興も湧かないが、当時の無心な子供の目にはなかなか美しく感じられたものである。ちぎり取って持ち帰り、バケツに浮べてながめ入ったりしていたが、金魚屋で売っているホテイアオイの様には行かずやがて枯れてしまった。現在、この池の周辺は大きく変わってしまった。かつての山林は消滅して団地や学校の敷地となり、近くの別の池は水泳や魚釣りにも向かない程に汚れてしまった。最近ひさしぶりに池を訪れて見たが、大きなヤナギの木や水辺の様子のみは昔の通りである。整然と並んだ多数のマッチ箱の如き家や大きなコンクリートの塊りのすぐ隣りに一区画だけ思い出の中から抜け出た風景がポツンと残っているのに一種異様な気を感じた。この池のそばには昔小さなほら穴があって、マサ土(花崗岩風化土)の中に石英脈が走っていた。この土をふるいに入れて池で洗うと小さくてきれいな水晶の粒を見つける事ができた。私達の遊びと言えばその様なものであった。今回この穴を探して見たが、どこだったのかわからずじまいであった。

市街の北は標高500m級の山塊である。秋の紅葉とてほとんど無いアカマツ林であるが、春には全山特有の林臭につつまれてコバノミツバツツジの花に被われるのである。山頂からそれ程下らない鞍部に6つの池が連なっていて、傍には平安期の山寺の遺跡がある。私が子供の頃にはどれも水がきれいで訪れる人も少ない山の池であった。いつの夏であったか、下から二番目の池である。大石のふち取る池水は透み切って冷たく、周囲は静寂そのものである。岸辺にポッカリと浮んだ何輪もの純白のヒツジグサの花。ササの葉の様なのはフトヒルムシロだったのであろうか。どの池も傾斜が急なのか、水草は少なかったが、一番上の池には何だったかたくさん浮んでいた様にも思う。その後、1966年頃に突然発破の音響と共に工事が始まって池まで車道が付いてしまい、やがて細い旧道は草に埋れた。この工事で池の水はかなり白濁してしまった。現在、キャンプ場や遊歩道も整備され、最も上手の池は湿地公園化されてハナショウブ等が植栽されている。あれは5、6年前に訪れた時であったか、池の濁りはかなり無くなっており、岸近くに少しばかりのヒツジグサとジュンサイを見たが、昔の様では無かった。ジュンサイの記憶は無いので、以前から目立つ程のもの

ではなかったものと思われる。

近所に小鳥や魚を飼うのが好きな年上の人が居て時々遊びに行っていたが、ある時ヒメダカの入った容器に丸い水草の葉が浮んでいて、手に取って見るとヒシとちがって葉柄でなく葉の裏側がふくらんで浮き袋状になっている。トチカガミの浮葉であった。この時であったか、又別の機会に他の人に聞いたのか、トチカガミは岡山に行った時に公園の堀で取って来たとか言ったのを憶えている。ここ数年の間に福山周辺の溜池などを見て回ってガガブタやミズオオバコを初めて実見したが、トチカガミの自生は未だに見た事が無い。又、サンショウモと言うのは昔だれかが採って来てくれたのを見た事があるが、その後は一度も再見していない。

家が芦田川の近くだったため、私の場合は山や街中よりも圧倒的に川と河原で遊ぶ事の方が多かった。当時は子供の世界ものんびりしたもので、現今の様にバカな用事も無く大いに戸外で遊びまくったものである。この辺りの地質は花崗岩が大半を占め、河床はどこも白っぽくて明るい色の砂である。かき回すと日射しを受けて黒雲母の粒がキラキラと光る。川の水も今とちがって透き通り、橋の上から水底の小石やカワニナがよく見えた。多量の雑魚に混じってアユも多く、岸の深みには大ナマズなどもたくさん居た。私は魚を釣るのは余り好きでなく、たいていは素手もしくは手網を持って川の中をごそごそ歩き回るのであった。砂溜りの部分などには大きなウジョウ（カマツカ）がたくさんもぐり込んでおり、足で堀り出しては網の中に追い入れるのである。真夏の炎天下では水の中とは言え暑くてのどもよく渇き、ふと気が付くとかなりの時間がたっている。目を転ずる石ころだらけの河原から瀬に向かってツルヨシが伸び、川風に涼しげに揺れている。ここから川を下ると砂地が多くなり、流れもやや緩んで川底にはクロモやエビモが所々に見られた。場所によっては支流の合流点などの様に泥が堆積してクロモやフサモ又はフサジュンサイの様な感じの水草がずい分と繁茂している事もあった。あの頃は川辺や付近の用水路周辺にもホタルが多くて、その黄緑色の光芒は夏の夜のあざやかなオオマツヨイグサ（当時はこれが多く、花の貧相なアレチマツヨイグサは無かった）の花と共に記憶に残っている。ところで、近年驚いた事の一つにカモメの飛来がある。初めて目撃してからもう十年近くになるであろうか、川の中流域に群れて浮いているのは何だか変な眺めである。鳥の世界にも異変が進行しているのか。

芦田川から引水した用水路が家のすぐ前を流れている。造られたのは17世紀初頭と言うから古いものである。エビモ等が生えてフナやハエ（カワムツ）がたくさん住み付いており、スナハミ（シマドジョウ）も居た。毎年、夏の朝にはこの水路から出るのか、近くの川から飛んで来るのか家の壁にキイロカゲロウの成虫や黒っぽい亜成虫がたくさん止まっていた。この水路では時に多量の大きな魚が弱って流下して来る事があり、近所の子供連中は時ならぬ獲物に皆大さわぎして駆け回ったものである。原因は解らないし、それはどうでも良かったが、大人の話では常に農薬であろうと言うことになっていた。

水質汚濁防止法などと言うものが出現する以前の事であり、事件として話題になる事もなかったが、今改めて色々と考えて見るにおそらくシアン廃水の流入ではなかったろうかと私は思っている。現に取水口に近い或る工場に関係したその様な事故が後年、芦田川で何度か発生しており、今では金属表面処理にシアン化合物を使わない工程へと転換していると聞く。当時の廃水処理への考えははなはだ気楽なものであり、たとえば私の家のすぐ近くの町工場では多量のクロム酸を含むオレンジ色のメッキ廃水を景気よくこの用水路に流し捨てていた。用水路が目に見えて変わり始めたのは1960年代に入ってからである。今でもはっきりと憶えているが、生活廃水の増大とりわけ洗剤使用量の激増に伴なって水は白濁し、水路の壁には緑褐色の藻類に代わって白っぽいミズワタ（糸状細菌）が多量に付着し、やがて水草も魚もほとんど見なくなってしまった。そうして次には市街地の水路の多くが悪臭のため、あるいは車道や駐車場として使用されるべくコンクリートや鉄板でふさがれてしまった。現在ひところの様な著しい汚濁では無い様であるが、回復は余り無く、下流の方ではおそらく相変らずのドブ川であろう。水草はエビモやイトモ、クロモ等が上流部分に今でも少し残っている。